

## 生理的天人相応

生体機能の天人相応関係には二つの曲面がある。1、時間的推移、即ち気象の変化に対応する生体リズム。2、空間的順応で即ち風土に対する適応。

1、生体リズム。即ち生体、殊に神経・循環系機能の時間的推移、変動である。これには日周リズム、月周リズム、年周リズム即ち昼夜、朔望、四季に於ける体調の変化がある。2、気象の影響。「天温かく日明るきときは即ち人の気血は渾液として衛氣浮く。故に血は瀉し易く、気は行き易し。天寒く、日陰れるときは即ち人の血は凝泣して衛氣沈む(素問26)」。3、風土の影響は風土病である。

## 三才的疾病観

素問の病因論は三才によって分類され、五行によって展開される。疾病の分類もこの三才によって行われる。

病因論。「夫れ百病の始めて生ずるや、皆、風雨寒暑(天の變動)、陰陽喜怒(人事の葛藤)、飲食居処(風土の生徳)より生ず(靈枢28)」。

疾病論。病は三才によって三つに分類される。天の病、人の病、地の病である。1、天の病(風の医学)としては、氣象病(寒暑燥湿による病。凍傷、熱射病など)、季節病(春の鼯趾、長夏の洞泄寒中、秋の風癢、冬の痺厥)、感染症(傷寒、中風)がある。2、人事の病としては、時の古今と病や治の古今についての考察(素問13、14)や心身症(素問77、78)の記載がある。3、地の病は風土に特有の病の記載がある(素問12)。

天人对応的診断としては脈診に於ける三部九候論、予後に於ける四時の脈と病人の脈の相応問題などがある。

天人对応的治療としては四時刺など、養生については四氣調神論の記載がある。

結び。三才は1、医学の構成に宇宙論的視点を導入した。2、健康と疾病の問題を自然環境と社会環境の中に包括的に把握した。3、生体リズム、病因論、疾病論の合理的構築に於いて有効性を発揮した。

(平成八年二月例会)

室町時代より江戸初期までの灸技術について

角 谷 貞 雄

室町時代より江戸初期までの医療の一術である灸術について、その用いられた経穴を五行穴・背俞穴・募穴等にわたり解析することで、次の様なことが判明した。

室町時代の半ばに僧月湖は灸技術について、宋・金・元医学を学び、その時代の人間にあった、灸法を確立し、以下のような独特な灸術を施した。

全九集巻七によれば技術的には体幹部正中線近くに、その時間に応じる募穴・俞穴を主に用いて気血を過不足無く、量的にも時間的にも循環させることが健康であるという概念をもとにし、また、施灸点に膿を発生させ免疫を高めるとい

治療法を行った。さらに、人体を三つに分けて、それぞれの部分に該当する部位の疾病に対して一点に千壮も施灸するという極めて攻撃的な独自の治療法も行っている。一日の施術時間は朝四時より六時まで、十時より十四時まで、十六時より十八時まで、二十二時より朝二時までとし、施術時間を制限している。

ついで、その弟子である田代三喜・孫弟子に当たる曲直瀬玄朔は啓迪菴日用灸法集において、さらに検討を加えて施灸がより疾病治療として社会に適用することの可能な灸法を編み出した。その技術は施灸点を体幹部正中線近くに求めるという前者を踏襲して、更により多くの施灸点を四肢部の絡穴を求め、施灸制限時間を午前六時より午前八時までと午前零時から午前四時までで圧縮し、施術可能時間を広げて患者の便宜を図り、より広い疾患に対処することを可能とした。絡穴の性質より、其の時間に応ずる経の疾患を抑制することが可能となり、長期の安静時間を持たない戦国時代にあう灸法ではある。その術はやはり施術点に膿を作る打膿灸法であり、免疫を高め疾病の経過を短縮する効果が得られるものと考えられる。

江戸時代になり、岡本一抱は集団社会に見られる都市型疾病に対処する灸法を考案した。その技術は体幹部施術法は腹部の陽経の募穴に対して激しい攻撃法(多壮灸)を用いて体外に汗・嘔吐・排便・小便を排出させるといふ張從正の説に従った手法を用いた。このように絡穴の使用法は応用されて用

いられることになり、その時間に応ずる疾病をよりの確に治療することが可能となった。この文献に見られる、一大特徴は鄒穴を攻撃的、または疾病の経過を抑制的に用いていることである。これまでの文献には見られないことであり、その用い方は素問靈樞にも記載が見られない。その他、四肢部の施灸手法については、今日見られる手法のほとんどが、この文献に見られる。手法の発展は制限付きの施術時間の制約を午前零時から午前二時までの間に圧縮して、ほとんどの時間を可能にした。

三者の技術は江戸時代初期に同時に用いられていた。このことは全九集を労働者型に、知的労働者には啓迪菴日用灸法集、労働者・虚弱者には処方の方から灸法口訣集の処方が良くあうとすることからである。時代的には大陸医学の金・元・明時代の手法を導入して改良を加えたことは以下の通りである。

全九集は主として資生經(二二〇)を、啓迪菴日用灸法集は鍼灸指南(二三一)を、口訣集は鍼灸聚會(一五四)・神応經(四五二)を基本書にしたことは各文献に、参考書の文体がそのまま記載されていることから判然としている。考え方は素問靈樞を解釈した劉完素・張從正・李杲・朱震亨等を学び、広く取り入れて、わが国の諸事情や疾病にあわせる工夫を為し、この時代を生きた医学者の実績を見ることができた、これらの人々を後世派と呼び、どちらかといえば、攻撃的手法のため、生命に対して弊害も出たが、この後に古法

派が出るまでの間約三百年間の主流派となった。

(平成八年二月例会)

ハーヴェー以前の血液循環理論について

藤 倉 一 郎

エラストラトスは動脈と肺静脈には血液はなく、空気が流れていると考えていた。しかし、ガレノスは動脈に針を刺して、血液が出ることから、動脈に血液があると考えていた。だが、血液循環という考え方には到っていないかった。

「腸から吸収された栄養分をもつ血液は門脈をへて肝にはいり、ここで「自然精気」が血液に加えられる。血液はすべて肝で生じ、静脈の中を行きつ戻りつする。その血液が大静脈をへて心臓の右側に達する。そこから肺にいたり血液のなかの不純物が外に出されてきれいになった血液が肺動脈とおろ心臓の右側に戻る。右心室から血液の一部が中隔の小孔を通じて左心室にゆき、ここで肺から肺静脈をへて心臓の左側に達した外界のプネウマと会って「自然精気」を「生命精気」に変える。左心室からでて全身にゆきわたる動脈は、この「生命精気」と血液を運ぶのである。その一部が脳に至って「動物精気」となり、それが神経によつて全身の諸器官に分かたれる。

このガレノスの理論は従来、一五五三年のセルベトス、一

五五九年のコロンボ、一五七一年のチェザルピーノ等によつて肺循環理論が発見され、ついでハーヴェーによつて一六二八年「動物における心臓と血液の運動の解剖学」によつて血液循環理論が確立されたと考えられていた。

ところが一九二四年フライブルク大学医学部のエジプト出身の若いアラビヤ人、アト・タタウィが、ハーヴェーよりも四〇〇年も前の一三世紀カイロのイヴン・ナフィスが肺循環理論を発見していたという学位論文を提出したのであった。

イヴン・ナフィスについて

イヴン・ナフィスは一二一〇年ダマスカスに生まれた。アラビアの医学史家で眼科医のウサイビヤは同じくダマスカスに一二〇二年に生まれている。二人は医学校も同じであり、同じ病院の同僚であったのである。ヌーリー病院の医長イブン・アッ・ダフワールが二人の師であった。二人はやがてカイロのナースリイ病院に移った。しかし僅かな月日の後ウサイビヤは、華やかなカイロの街を離れて、シリヤの砂漠へいき、シリヤ大公に仕えることになるのである。ウサイビヤの「医師列伝」は三九九人のアラビアの医師の伝記を書いたもので一二四五年に完成しており、ヨーロッパにも伝わって有名であるが、イヴン・ナフィスには触れていない。ナフィスは長い間ナースリイ病院の医長をつとめ、カイロの医師の長の職を果たし、講義を続けた。ウサイビヤは自分より若い出世したナフィスに会うことがなかった。

他の伝記作者は次のように伝えている。ナフィスは背が高